様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３４３１１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０１９８

研究課題名（和文）明治期京都の工芸の近代化に関する研究―「京都策」をとおして

研究課題名（英文）The modernization of the crafts industries in Kyoto on Meiji era

研究代表者
平光　睦子（HIRAMITSU, CHIKAKO）

同志社女子大学・生活科学部・准教授

研究者番号：７０２７８８６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、明治期京都の工芸の展開を「京都策」という勧業・街づくり策に照らし合わせ、京都の工芸が近代工業化しなかった経緯を明らかにすることである。工芸の近代化の関連事項を当時の地図上におとしこみ近代都市形成の一環として読み直した。その結果、積極的近代化から工芸の範囲内での限定的改革へと方針が変わるのは第二期京都策の期間であり、この頃から市街周辺の新しい機械工業地域と市中心部の工芸地域という住み分けが生じたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：On Meiji era the crafts industry had not modernized in Kyoto. The purpose of this study is to clarify the main cause of that, with referring to the “Kyoto Plane”. The author had made the Kyoto city maps drawing the events relevant to the crafts industry to reconsider the modernization process. The results show that there was a turning point from the positive modernization policy to the limited, in the middle period of the Meiji era. The crafts industry divided into the separate industrial areas, the new mechanized industry in the suburbs and the conventional crafts industry in the city.

研究分野：人文学

キーワード：工芸

１．研究開始当初の背景

明治初期に、日本のモノづくりかに西欧から「美術」という概念が移入された。そのことによって「美術工芸」という分野が成立下は、同時にそれには該当しない「工芸」という分野を生み出した。この「工芸」は明治中期頃から生産手段が機械化されることによって「工業」として「美術工芸」と明確に区別されうる領域になるのだが、京都の工芸産業では大規模な機械化は進まず「美術工芸」でも「工業」でもない「工芸」が存続した。このような経緯からすれば、「工芸」は美術や機械工業といった西欧からもたらされた新しい知識や技術を受け入れなかった結果と見なすことができる。とはいえ、京都の「工芸」は明治初年代から積極的に近代化に乗り出し技術改良や新技法の発明等多くの成果をあげた。では、いつ京都の「工芸」は近代化の路線から逸れることになったのだろうか。そして、何が「工芸」と「美術工芸」、「工業」をわけたのだろうか。これらの疑問が着想のきっかけである。

美術工芸分野の成立過程に関しては平成10 年頃からいくつかの重要な先行研究が発表されてきたが、その多くは国家行政受動の動向を中心とした研究であった。一方で明治期の京都の工芸および美術工芸についての研究は、おもに個々の工芸分野の各論として進められてきた。しかし、その両者を積極的に関連づけ、京都の工芸を総論として扱う研究はあまりなされてこなかった。

２．研究の目的

本研究の課題は、明治期京都の工芸の展開を「京都策」という勧業・街づくり策に照らし合わせ、京都の工芸が近代工業化しなかった要因を明らかにするとともに、そこから見えてくるであろう工芸的価値観について考察することにある。

３．研究の方法

明治期京都の工芸の近代化に関する地図を作成し、ついでその結果に関して以下の視点から分析する。（１）「京都策」の一環としての西洋から導入された新しい知識や機械等が、工芸においていかに技術改良や技法の発明に結びついてか。（２）「京都策」でとりあげられた街づくり案や実行された都市政策がいかに工芸産業と関係しているか。（３）上記（１）と（２）の影響関係。

４．研究成果

「京都策」とは、明治期の京都における勧業及び街づくり策のことである。一般に、「京都策」は 1868（明治初）年から 81（明治 14）年までの第一期、1881（明治 14）年から 95（明治 28）年までの第二期、1895（明治 28）年から大正年間までの第三期にわけられる 。第一期は京都近代の黎明期であり、槇村正直知事らが牽引した時期である。第二期は、北垣国道知事のもと、いくつかの大規模事業が行われた時期である。そして、第三期は、三大事業といわれる水利、水道、道路拡張と軌道敷設が完成した時期である。京都の場合、幕末には市域の三分の一を戦火によって消失し、次いで東京への遷都によって帝都の地位を失い、近代という時代はいわば廃都からの出発であった。「京都策」最大のテーマはそこからの復興である。明治期の京都の勧業街づくり政策がことさらに「京都策」という名で呼ばれるのは、官民問わず立場や職業の異なるさまざまな人々が論じ、具体的な施策から全体の方針や将来への展望まであらゆる視点で京都の先行きについて意見を交わしたからだと考えられる。本研究では、「京都策」の第一期から第三期までの期間を目安とし、明治期京都の工芸の近代化に関する地図を、年代毎に 3 点制作し、それらをもとに分析した結果、「京都策」のなかでも第一期京都策（1868 年～81 年）と第二期京都策（1881

年～95 年）との間で、大幅な方針転換があることがわかった。

第一期には、新しい技術や知識、新しい機械の導入に向けて積極的に取り組んだ期間であった。観光都市化か工業都市化か、という二項対立の図式が明らかにあるものの、工業都市化にむけて着実に進展しており、その成果として、人造染料やジャカード織機が導入された。なかでももっとも大きな事業は諸工業の機械化を目的とした、琵琶湖疎水工事着工であった。しかし第二期になって、完成した琵琶湖疎水における製造業の電力利用が停滞するなかで、より一層の工業の機械化を既存の工芸産業とは別に考える傾向がみられるようになる。

以上の経緯は、地図上でも確認することができる。研究の方法で示した分析の視点からは、それぞれ以下のような結果をえた。

（1）染織工芸の場合、技術改良においてはジャカード織機の導入および普及、人造染料を用いた型友禅の拡大など、一定の成果をみた。しかし、大規模機械工場の設立および動力を用いた機械化については、あまり進展しなかった。その典型的な事例として、国内初の本格的な西欧式染織製造会社である京都織物会社があげられる。京都織物会社は、本格的な機械設備を備えた染織工場として 1887 年に創立した。京都府が全国に先駆けて洋式染織法をとりいれたことで知られる、織殿の払い下げを受けての開業であったが、ほどなくして 1891 年には経営不振のため方向転換を余儀なくされた。工場規模は縮小され、製品は絹織物から綿織物に、洋風織物から和風に、外国人技師は日本人職工にという、海外輸出向けから国内需要向けへおもな製品の転換であり、「美術工芸」から「工業」への転換であった。

（2）明治期京都の街づくり案や都市政策において、もっとも工芸産業と関連が深いものが琵琶湖疎水の建設である。琵琶湖疏水は 1881 年に着工、1890 年には三保ヶ崎から伏見までが完成し、工業用水、灌漑、水力発電、水運などへの利用がすすめられた。製造業のなかでも西陣の織物業への電力供給が第一の目的であった。しかし、計画当初は工業都市化推進策の色彩が濃かったが、第一疎水が完成すると工業の電力利用には限界が見え始める。琵琶湖疏水の水力発電の利用は 1892 年にはじまったが、実際には織物製造の機械にはほとんど使用されず、工業利用の大部分は精米用であった。明治 30 年前後に 100 馬力以上の電力供給を受けていた製造工場は、京都紡績、西陣製織、村井兄弟会社などの 5 件のみで、中小規模の工場をあわせてもわずか 60 件程度であった。最終的には、第一琵琶湖疏水は計画通りに完成したものの、当初の第一の目的は達成されたとは言い難い。結果として、琵琶湖疎水を含む京都市南東部や北部および市街周辺に形成されはじめた機械工業地域と市中心部の工芸地域という住み分けが生じることに繋がった。

（3）既存の諸工芸産業のなかには、新しい技術の導入には積極的にのりだしいくつかの技術革新をなしとげ、比較的量産化が進んだものもあった。工芸産業が盛んな地域自体は拡大したものの、同時に地域内部での零細化が進むこととともなり、大規模な機械化に限界を設けることに繋がった。

その典型的な事例として、染織産業におけるジャカード織機の導入が揚げられる。ジャガード織機の導入によって、京都市北西部の西陣地域の産業規模は拡張を遂げ、京都における織物産業の重要性が増していった。しかし、ジャガード織機の導入によって西陣全体の総生産量が増加したとはいえ、同時に製品の多様化も進んだのであれば、必ずしも生産

効率が向上したとはいえない。さらに、織物業の零細化が機動力の自動化に歯止めをかけることになり、明治後期にはその限界が見えてくる。

工芸的価値観を一概に規定することは難しい。しかし、以上の結果から考えられるのは、継承と革新のバランスに関係するということである。京都の場合、街や産業構造という外枠は継承から大きく外れることはなく、革新はその範囲内で進められた。継承と革新のバランスのあり様に「工芸的」と呼ぶに相応しい感覚が存在すると考えられる。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計１件）

平光睦子、「『京都策』における工芸の近代化　－染織産業を中心に－」、日本フェノロサ学会大会、2013 年 9 月 21 日　大阪大学中之島センター。

６．研究組織

(1)研究代表者

平光 睦子（HIRAMITSU CHIKAKO）
同志社女子大学・生活科学部・准教授
研究者番号：70278860